

開会の挨拶

樋口 保成（神戸大学附属図書館館長）

みなさん、ようこそおいで頂きました。来週3月11日で東日本大震災からちょうど2年になるようとしています。最近ではテレビでも東日本大震災のその後のなかなか大変な問題があるということも報道されております。それを見るにつけてもやはり被害の規模が大きく、なおかつ複雑であるということを感じていく次第であります。それでも2年経って色んなところで復興され、その過程で様々な事業が行われている。それに伴う資料がそのまま失われていかないように何とか我々で集めていって後世に残していく、そういう仕事は図書館が行っていく、そういう風に考えております。神戸大学の震災文庫は阪神・淡路大震災のときにそういう気持ちで立ち上げて、避難所のチラシ、地図や写真などを網羅的に保存するというところでやって参りました。現在は5万点を保存しております。そのうち5,000点ほどはインターネット公開しているという状況であります。また、最

近は国立国会図書館の東日本大震災アーカイブに協力いたしまして、震災文庫の資料も検索出来るようになりました。この情報交換会ですが、震災資料の収集・公開に関する問題を話し合い、人的ネットワークを構築する目的で去年度2月21日、22日の2日間開催いたしました。そのとき参加いただきました東北大学、岩手大学、岩手県立図書館、宮城県図書館、それから阪神の方からも集まりまして二十数名参加頂きました。今年度は昨年度の参加館に加えまして、福島大学附属図書館、それから国立国会図書館に参加頂いております。参加人数は26人と昨年と一緒です。この情報交換会で各図書館の現状報告と意見交換会を通して、今抱えている問題や課題などを共有いたしまして、今後活かしていきたいと思っております。本日はどうぞ活発なご議論を宜しく願います。

趣旨説明

奥村 弘（神戸大学大学院人文学研究科教授）

奥村でございます。遥々よくおいでくださいました。実は今年はこんなに沢山来て頂けるとは思っていませんでした、「10人位の小さな会を今年も出来たらいいな」と宮城県図書館と岩手県立図書館にお邪魔したときに思っておりました。これだけの人数になったということは逆に言えば、東日本大震災の中で震災の記憶を未来へどうやって引き継いでいったらいいのかということが、これはもちろん阪神・淡路大震災のときも大きな課題となりましたけれども、東日本の中でも今、大

きな課題になっているんだなという風に改めて私どもの方も気付かされたところでございます。それで、今日の会なんですけれども、ちょうどそういうこともありまして、2年目に入って、丸々3年目に入ろうとしているところなんです、ちょうどそのことを含めて現在、記録・記憶を未来へ残していくということでどうやって震災の記録を保存していくのか、活用していくのかということが被災地の中で大きな課題になっているという風に考えております。私どもの方もそれに協力しな

がら私たちが出来るようなことは何かのか、ということで様々な活動を神戸大学の方でも広げて来ております。その中で、今日はやはり一番収集と活用の問題を意見交換をしながら進めていきたいと思っているところです。もう既に図書館関係の方はご存知のように、樋口館長のお話にもありましたように、国会図書館の方がアーカイブを公開いたしました。デジタルアーカイブの持っている様々な力というものと共に、一方で、この夏、私どもがお邪魔いたしました岩手県や宮城県の図書館の方では現場へ行って資料を集めてくるという地道な作業を通した災害の記憶を未来へ残していくための活動も進められているという風にお聞きいたしました。私はこの両方が相まらないうと震災の記憶がなかなか未来へ伝わらないんじゃないかなという風に考えております。神戸大学附属図書館震災文庫の中でもこの間、色んな図書館や博物館に資料の貸出をされておりますけれども、そこにある生の、実際に被災した人たちが触り、考え、見て、作ったものがその次の世代にも見て頂けるといふ、またそれを見て考えて頂けるといふようなところがございます。そういう意味でも生の資料や図書の持っている力というものは一方で大きなものがあるように考えているところでございます。そういうことを含めまして今日、議論が出来ればなという風に思いますし、それからもう一つは実は収集をすることの中に既に文化や復興のことが含まれているように思います。これは神戸大学の震災文庫の経験もそうでございますけれども、集めるということは直接その集める方と会話をして、議論をして、そして寄贈頂くわけなんですけれども、どちらもある意味被災した者同士なんですけれども、その人たちがそういう集めるということで、話をする事自体が集める方も集められる方も励まされるということがあるように私は思います。特に、よく震災資料の保存と活用という風に言いますがそれ程単純なことではなくて、やはり被災した地域の文化というものがどのような形で復興していくかということになりますと、これは私は収集そのものが実は重要な

文化活動ではないのかなという風に考えているところでありまして、それも含めて色々なご経験が聞ければいいなという風に思っているところでございます。収集や活用に関しましては、収集と活用と二つに分けて議論することも多いのですが、実はその線引きはあいまいなものでございまして、長期的には様々な形で同じものが違った側面で機能を果たすことも神戸大学の震災文庫ではあるように思います。あるときには博物館や図書館、市民の方に活用され、あるときには防災の研究者の方に使われる。ときには地域の歴史文化を考えるとときに使われる。年月が経ってくると様々な役割を果たすようになってくるようにも思っております。そういう問題も含めて少し神戸大学や兵庫県の図書館の取り組みを含めて色々な意見交換が出来ればと一方で考えておりますので、この点でもよろしくお願いいたします。以上で終わります。